

ウシの第一胃気腫

岩手大学家畜病理学教室 出題
山形県内陸食肉衛生検査所

第20回獣医病理学研修会標本No.321



動物：ウシ(ホルスタイン種), 3才, 去勢雄, 山形県産。

臨床：肉用肥育ののち, 1976年8月3日に山形県内陸食肉処理場においてと殺された。生前に異常は認められず, 体重490kgであった。

疫学：山形県内陸食肉衛生検査所において, 別の目的を持って, 1976年の8, 9月にと殺され, 同検査所で取り扱った239例について, 材料を採取し54例, 22.6%に提出標本と類同の病巣を認めた。

肉眼所見：本例の第一胃液pHは7.4で, 内容は本例を含めて多くは堆肥状となるものが多かった。病巣は腹部端盲嚢部胃壁に主座し, 広狭の広がりを持って時に腹部底に認められることもあった。壁は気腫状に厚みを増し, 乳頭の配列が乱れ, 圧により捻髪音を聞く。剖面上主として粘膜下織に気泡を認めることが出来た。粘膜は粗剛となるものが多かった。

組織学的所見：主として粘膜下織に空胞が見られ, 腔内にモヤモヤした蛋白物質が存在した(図1, H・E, ×58)。一部には巨細胞や白血球の浸潤も見られた。なお, 空胞が固有層に見られる場合もあった。空胞は巨細胞により

内張りされ(図2, H・E, ×112), その附近の結合織中にも巨細胞が認められた。さらに腔内への巨細胞の脱落や, 好酸球の浸潤も認められた。この種の病変は恐らくはリンパ管と思われる管腔内に, 最初に単純な気腫が見られるようで, 病変が進行したと思われるものでは, 管腔内に敷石状に巨細胞が充満してみられるものもあった。さらに治癒に向ったと思われるものでは, 粘膜下織の著明な線維化と, 脈管の増生, リンパ球, 組織球, 好酸球などの強い細胞浸潤が見られるものもあった。

なお, 山形県内陸食肉衛生検査所で多数例について実施した細菌学的検査結果からは, 嫌気性菌を含め特定の原因菌を分離するには至っていない。また切片の菌染色標本においても病巣内に細菌を認めることができなかった。

以上, 提出標本の診断は, 豚の腸気腫と組織学的類似が認められることから, 「ウシの第一胃気腫」とし, 原因については肥育牛という第一胃内容の状況から, 第一胃内容の十分な混和が出来ないで, 胃内ガスがリンパ管を介して粘膜固有層ないし下織に移行したのではないかと思われた。